

日本の野党は「任せてもいい」？ 14年ぶり政権交代の英国で考えた

🔒 有料記事

ロンドン＝藤原学思 2024年8月19日 17時00分

🗨️ コメントプラス

🗨️ 遠藤乾さんのコメント



英国議会が議事堂として使用するウェストミンスター宮殿=7月、藤原学思撮影

政権交代に欠かせない要素はなにか。信頼するに足りる野党だ。それを思い知った。

7月4日、英総選挙の投票日当日。駐在先であるロンドンから1時間あまり電車に乗り、南東部ジリングムを訪れた。

1979年の総選挙からずっと、ここで勝った党が政権を担っている。ジリングムの有権者の意見を聞くことは、結果の予測に役立つと考えた。

「政権から落としたい」

地元の教会から、投票を終えた市民が出てくる。私は記者証を見せ、声をかける。「どこに投票しましたか？ なぜ？」

セラピストのローラ・ボールドウィンさん（39）は労働党に投票した。「いまの政治に満足できない。保守党を政権から落としたいから」。理由は明快だった。

労働党を強く支持しているわけではない。ただ、保守党に勝ってほしくはないし、勢いのあるポピュリスト政党に議席を与えるのはばかられる。そんなことも口にした。そして、それはボールドウィンさん一人ではなかった。

結局、労働党はジリングラムを含め、650議席のうち412議席を取って大勝。保守党は121議席と、歴史的な大敗を喫した。14年間政権の座にあった保守党の支持率はこの1年半ほど、20%台前半と低迷していた。

英総選挙の期間中、現地紙は保守党の苦境を報じていた 

「与党に不満」日英で共通するけれど…

日本に目を向けると、自民党政権が11年半続く。朝日新聞が4月に実施した世論調査

では、今後の望ましい政権について「自民党以外の政党による政権」が48%で、「自民党を中心とした政権」の39%を上回った。

望ましい政権は？ 朝日世論調査 →

また、6月の世論調査では、自民党の支持率は19%にまで落ち込んだ。一方で、各野党の支持率も10%未満だった。

こうした結果を見ると、英日は「10年以上政権を担う与党に、国民が大きな不満を持っている」という点で共通する。なぜ、英国で実現した政権交代が、日本では難しく思えるのか。単純比較はできないし、日本に政権交代が必要かは別として、両国の差異を考えてみたい。

天皇、皇后両陛下の訪英に合わせ、バッキンガム宮殿へと続く「ザ・マル」には日英両国の国旗が掲げられた 

私はまず、立憲民主党のある国会議員に電話をかけた。「これだけ自民党の支持が落ちているのに、こちら側が、日本の未来像を示せていない」と吐露された。

自民党派閥の裏金事件が起きて、立憲をはじめとする野党は激しく追及した。ただ、「言ってみれば『それだけ』。裏金以外の部分は自民党でいいと、思われている」。そ

う嘆いた。

「安心感、安定感」。英国の有権者取材で何度も聞いた言葉だ。それらが自分たちには足りないと、この立憲の議員は言う。さらに「中間層に訴求できていない」ことも弱点だと指摘した。

「みなができる限り良い選択を」

英労働党は今回、そこにこそ力を入れた。前回2019年の総選挙では、急進左派として知られるコービン党首のもとで惨敗。その経験から、スターマー現首相は穏健・中道派層の取り込みに完全に路線を切り替えた。

選挙期間中、私は複数の注目選挙区を訪れた。英イングランド東部グリムズビーもその一つ。元公務員、フィリップ・トンプソンさん（55）の言葉が印象に残っている。

「結局のところ、政治は国民に委ねられる。全員が正しい判断をする必要はない。ただ、みなができる限り良い選択をしようとするものだ」

6月、マニフェスト（公約集）を発表する労働党のスターマー党首（現首相）=AP 

その「できる限り良い選択」の集合体が、政権交代につながった。私は総選挙当日、スターマー氏について「最大公約数的な政治家」と書いた。まっすぐ、まじめに、まんなかに訴える。勝つためには急進派も切る。そうした堅実かつ冷徹な姿勢が、有権者に「任せてもいい」と思わせた。

もちろん、政権交代の実現性は、選挙制度によるところも大きい。

英国は下院議員だけが公選対象で、小選挙区制だ。650の選挙区から1人ずつ、最も多い票を得た候補が選ばれる。死票は多くなるが、二大政党には有利に働く。

一方、日本は衆院議員465人のうち、選挙区から289人、政党の得票率や惜敗率が考慮される比例代表として176人が選ばれる。小さな政党でも議席を得られるが、二大政党制は確立しづらい。

日本の野党に「ビジョン」はあるのか 日英識者の見方

日英の政治制度に詳しい小堀真裕・立命館大教授（比較政治）は、衆院だけではなく参院もある点など、両国の選挙制度の違いを挙げつつ、100年以上の歴史を持つ労働党には「代わっても大丈夫だ」と思わせる地力があると話す。さらに、長らく「経済に弱い」と思われていたが、今回の総選挙では「ビジネスに配慮する」という姿勢を強調していたことも、大きいとみる。

ロンドンで7月、チャールズ国王の演説を聴く上院議員と下院議員。代表撮影=AP 

「日本の場合、野党は経済についてあまりにも話さなすぎる。交代したら、どんな政権になるのだろうと、その『ビジョン』が見えてこない」

東京大学大学院の小川浩之教授（現代英国政治外交）は、英国では二大政党制が約150年続き、有権者側にある種の前提として組み込まれていること、また、2大政党の「弱くなった側」も有能な候補やスタッフらを引き付けることができることを指摘した。

ただ、小川教授はこうも付け加えた。「日本に小選挙区比例代表並立制が導入されたのは1996年で、2009年に本格的な政権交代が起きた。もう少し長い目で見れば、『自

『民党優位の二大政党制』のようなものに移行していく可能性がないとも言い切れないのでは」

英国の識者の目に、日本の政治はどうつるのだろう。ウォーリック大のクリストファー・ヒューズ教授（日本学）は、「自民党はある種、キャッチオール（包括的な）政党だ」と指摘した。自民党の内部で幅広い政策論争が行われ、逆に他党は違いを打ち出しづらくなっている、と言う。

英労働党が今回の選挙で証明したのは、「完全に信頼されていないとしても、『より良い代替案』として見られていた」（ヒューズ教授）ということだ。AがダメならBで仕方ない――。労働党は、少なくともそう思ってもらえるだけの政策を打ち出していた。

「議会政治の母」から学ぶこと


英国は「議会政治の母」といわれる。保守党はここ数年、激しい混乱ぶりを見せていたが、それでも、「この姿勢には日本の野党も学ぶべきところがある」と思わされた瞬間を紹介したい。

7月9日、総選挙後初の議会下院の初顔合わせ。与野党の座席はそれまでと逆になり、「前首相」となったスナク氏が、野党党首としてスピーチした。

スターマー氏に祝意を送り、「有権者や国家のため」という原則の重要性を語り、こう訴えた。

「きょうから私たちは、野党としての役割を、プロフェッショナルに、効率的に、謙虚に、担っていく」

スナク氏はさらに、言葉を続けた。

ロンドンで2024年7月17日、議会の開会式のため、上院の議場に向かうスターマー首相（中央右）とスナク前首相（中央左）。代表撮影=ロイター 

「ここ（議場）にいることは、我々の奉仕する人びとが期待していることを実行する機会だ。そして、私たちにとっては、新しい政権の言動に責任を持たせることを意味するのだ」

歴史的な大敗を喫した保守党の立て直しには、相当の時間がかかると予想される。ただ、総選挙で敗北が明らかになって、わずか4日後にこうしたスピーチができるという「グッドルーザー」ぶりに驚いた。

きっと、この態度こそが英国政治の強みであり、保守党の「信頼の回復」の一步になるのだろう。そして英国の二大政党制はまだしばらく、続いていくはずだ。（ロンドン＝藤原学思）

この記事を書いた人



藤原学思

ロンドン支局長

 フォロー

専門・関心分野

ウクライナ情勢、英国政治、偽情報、陰謀論

コメントプラス

注目コメント試し読み >



遠藤 乾（東京大学大学院法学政治学研究科教授）2024年8月19日9時0分 投稿

【視点】 総選挙後、目の向かいがちな政権与党でなく、野党を考える良記事です。
対抗政党って特に夢を託さなくても、与党が失敗したときにそれなりに統治できれ...[続きを読む](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.